

後世に残る遺産

内藤 普三郎

昭和五十三年十二月十五日大平内閣成立直後、日教組は全国一斉ストを決定して文相に会見を申し込んだ。日教組の全国一斉ストは大平内閣にマイナスであると思い、ストをやるなら日教組との会談に応じない、ストをやらないから会談に応じてくれとの日教組の要請を新聞発表するが差支えないかと横枝委員長に申し入れたところ、差支えないとのことなので、日教組との会談に応じることにした。その経過を大平総理に電話してご了解を求めたところ、大平総理は大変お喜びになり、「内藤さん、誠心誠意やって下さいね」とのお言葉でした。

私が日教組と対談して四十人学級実現に努力を約束したことに對し、自民党文教族の方々から異論が出たが、私は大平総理のご支援を確信し四十人学級実現に努力した。欧米の先進国では学級規模は三十人程度である。国際社会で活躍する日本が国際社会の趨勢をよくみて、生徒数が減少する時期に財政上過大な負担にならないように四十人学級を実現することは当然のことだと思う。四十人学級の実現は大平総理のご英断の賜物である。

昭和四十五年三月、文部省時代大変お世話になった元文相の松村謙三先生と衆議院の古井喜実、田川誠一両先生とともに中国にまいり、毛主席、周恩来首相等と会談して約一カ月後に帰国した。当時日本では、台湾の蔣介石総統が損害賠償を取らなかつたので日本人は台湾に感謝していた。昭和四十七年、大平外相は田中首相と中国に行かれ日中国交回復を実現された。大平外相の帰国後、私は友人とともに赤坂の料亭に大平外相をご招待して、日中国交回復の際の交渉の詳細をつけたまわった。その時、田中総理も中国行きを決つたので、大平外相が「君

は国内ではやりたいことは何でもやった。いつ殺されても悔いはないだろう。死場所を得たと思え」と話して無理やり訪中させた話をして下さった。昭和四十九年二度目の訪中では日中航空協定を締結された。その後、石油が埋蔵されている尖閣諸島の領有権は棚上げにし、昭和五十三年十月、中国の鄧小平副主席が初めて訪日し、大平首相と日中平和友好条約を締結した。その結果、損害賠償も要求しなかった。大平先生は日中国交回復の立役者として後世に永遠に残る立派な遺産を国民に残して下さいました。

昭和五十四年九月、総選挙が行われた。選挙についても異論が出た。内閣でもいろいろな意見が出たが、大平総理は一度決断すると断行する方であると思つた。選挙の結果は期待したように行かず、党内では四十日抗争が展開された。渡辺農林水産大臣と私の二人に総理から党本部の総会に出席するように要請があつた。私も内閣の一員として党本部八階の入口まで行つたが、大変混乱して押し返され、私は健康が勝れなかつたので入室できなかつた。昭和五十四年十一月三日、文化勲章の授章式典で皇居に参内の節、大平総理にお詫びした。

昭和五十五年五月十六日、内閣不信任案が可決されて、大平総理は衆議院を解散された。昭和五十五年五月三十日、参議院選挙が始まつた。大平総理が自民党本部の中庭で講演されているのを拝見したのが最後の瞥見であつた。その後、横浜にお出でになり、帰京後、虎の門病院に入院された。私も前大臣として虎の門病院にお見舞に参上したが、お目にかかることができなかった。大平総理の英断により衆参同時選挙は自民党が圧勝した。その結果を見ずにこの世を去られたことは残念至極である。

私は教育一筋に四十年間努力した。その労に報いるため私を文相に起用して下さいました大平総理に感謝するとともに、自民党総裁大平正芳先生からいただいた「一言重百金軽」の色紙を家宝としてご遺徳を偲びつつ大平先生のご冥福を心からお祈り申し上げます。

(参議院議員・第一次大平内閣文部大臣)